

花粉症の季節も一応終わろうとしている。年々かかる人が増えている。様々な理由が言われているようだが、私は大きな要因として冷えの文化の浸透をあげたい。

「花粉が悪い、杉を切れ」などと言う人がいる。花粉が少なくなるように薬剤を杉に注入するという研究もあるようである。浅はかとしか言い様がない。問題があるのは花粉症の人自らであり、そうした人を生む現代日本の文化である。杉を切ったところで、《冷えのぼせ》を悪化させる不摂生をやめなければ、今度はヒノキの花粉に反応したり、ハウスダストに反応したり、化学物質に反応する(からだ)になっていく。自らが敵を作り出しているのである。杉を異常に多数植林した政策の問題や化学物質の蔓延という問題もあるのは言うまでもない。

花粉症は《冷えのぼせ》状態にアレルギー要因が加わっている。そういう意味でアトピー性皮膚炎や喘息などと近い関係にある。アレルギーはいったんそうした(からだ)に陥ると脱出は簡単ではない。←血(血毒)と関係が深い。

《冷えのぼせ》が強い程、花粉に強く反応し、また逆に花粉によってアレルギー反応が起こることで、《冷えのぼせ》状態は更に悪化する。花粉症の人の頭頂部を触ると熱くムンムンした感じがする。からだの下部が冷えている為に(気)は上に衝き上がり、熱気と湿気が頭部に上って来る。花粉に感応しやすい状態が生まれる。目や鼻やノドの粘膜が花粉に感応し炎症が起これば、更に(気)を引きつけ、(気)を上衝させる。悪循環である。

悪循環を防ぐ為にマスクや眼鏡など花粉と接するのを避ける手段は有効であり、下手な西洋医学的な薬を飲むよりも勧められるが、根本的な対策ではない。根本的方策は、アレルギーを無くすこと、あるいは《冷えのぼせ》を無くすことである。アレルギーはともかく、《冷えのぼせ》は努力した分だけ減らすことができる。逆に冷飲食など不摂生を続ければ更に悪化する。

《冷えのぼせ》の本体は腹の冷えである。腹の冷えとは腹部の機能減退であり、必ずしも温感的に「冷えている」とは分からない程度の場合もある。

東洋医学に「陰主陽従」という言葉がある。病気になった場合、激しい熱的症状に目を奪われやすいが、その根本には陰的な状態がある。ノボセ、鼻水、目の痒み、クシャミ、咽痛などの花粉症の陽的な症状を生み出す(からだ)は、同時に腹の冷えという異常を呈している。

陽的な症状に直接働きかける対症療法は必要な場合もあるが、根本的な解決にはならない。逆にその主体であり陰たる腹の冷えを改善すれば、その従たる花粉症は自ずから治っていくのである。

東洋医学では病を大きく陰証・陽証に分けて理解する。漢方薬のカゼ薬として有名な葛根湯は陽証の薬である。あまり発熱せず、寒気ばかりが強いカゼには効かないばかりか、悪化させる。ノボセの目立たない、いわゆる冷え性は陰証であり、熱的症状に悩まされる花粉症は陽証である。だが、いずれにしても陰(冷)と陽(熱)が同時に存在しているのである。(からだ)が陰陽に分離してしまっていることに違いはない。物事を帰一させるのが東洋医学の観であって、物事を分けていく方向で理解する西洋医学や近代科学との根本的な違いである。いわゆる漢方薬を使っても、鍼や灸を使っても、こうした病の捉え方ができなければ、東洋医学とは言い難い。手段の違いは枝葉末節の問題である。

西洋医学は陰陽に分離した(からだ)を見れない為に、部分的な症状、特に陽的な症状を抑えようとする傾向がある。そしてその症状を抑える為に、解熱剤や降圧剤、抗炎症剤、抗生物質を多用することで成り立っているのである。まさに冷えの文化の一つであり、陰証の病を増やしている。また(からだ)を部分的にしか見れないことによって、壊病(えびょう)を増やしているのである。壊病とは(からだ)の正常な反応を邪魔する為に呈する病的な状態である。

こうした東洋医学の観でイラク問題を見てみよう。戦闘の激しさ・悲惨さ、あるいは「解放」の喜びは陽である。では陰は何か。東洋医学の観で食のあり方を見てみよう。陽は何か。陰は何か。そこに陰陽一如、表裏一体の全体像が見えてくる。

(2003年4月清明)